

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32720

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350053

研究課題名(和文) 保育者養成における子育て支援力養成の枠組みに関する研究

研究課題名(英文) Study on a framework about the practical specialty of parenting support in Early Childhood Education and Care in Childcare Teacher Training

研究代表者

矢萩 恭子 (Yahagi, Yasuko)

田園調布学園大学・大学院人間学研究科・教授

研究者番号：60389830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年、保育者の専門性として位置づけられるようになった“子育て支援力”養成の実態について、保育者養成校と子育て支援施設への調査・分析を試みたものである。その目的は、子育て支援実践の場との連携による新たな保育者養成の可能性を明らかにすることである。養成校を対象としたアンケート調査、日本・ニュージーランドにおける視察および聞き取り調査を行った結果、カリキュラム内外で実践されている現状が多く明らかとなり、子育て支援実践の場における学生の学びの意義が十分認められた。但し、実施上の課題も否めず、特に、身に着けさせたい“子育て支援力”は、多様で多層的であった。今後、さらなる有効性検証の必要がある。

研究成果の概要(英文)：In this study we tried to analyze and inquire the present status about the practical specialty of parenting support from the point of coordination between childcare teacher training and child-rearing support facilities. Our purpose of the study was to clarify new and different possibility of childcare teacher training system by way of the collaboration with on-site childrearing support facilities or fields. We carried out the survey on childcare training schools. Also we made on-site inspection of various types of facilities for childrearing support both in Japan and New Zealand. As a result, we can say students could get some significant specialty for childcare through on-site studies of childrearing support some of which are designated as "course of study", others are offered as optional programs. We have to say at the same time, there are so many problems on sending students to on-site training fields. Especially because ways and purposes of the training are so different.

研究分野：保育・幼児教育学・子育て支援

キーワード：子育て支援 保育者養成 子育て支援力 保育実践力 保育の専門性 保育学生 実習生 国際比較

1. 研究開始当初の背景

少子化・核家族化に伴う待機児童問題などの社会状況や、子どもや子育てを取り巻く環境の変化に伴い、「保育者の専門性」の中で、近年最も強調されるようになったのが、安心して子どもを産み育てることのできる社会の実現へ向け、多様な保育ニーズに対応する「子育て支援」である。2012年8月に「子ども・子育て関連3法」が公布、2013年4月には、国による「子ども・子育て会議」が設置され、内閣府の下に保育および子育てに関する制度が一元的体制に置かれることとなり、また、2013年5月には、2007年度より法定化された「地域子育て支援拠点事業」について、その機能を強化するための再編が行われた。2013年10月に財源とされる消費税増税が決定し、2015年4月からの新制度施行に向け、地域における子育て支援事業のさらなる強化が進んでいくと予想される状況下にあった。

ここに繋がる流れとして、1989年の合計特殊出生率の1.57ショックから、『厚生白書』(1990)に初めて「子育て支援」という用語が登場し、1994年のエンゼルプラン以降、少子化対策としての子育て支援施策が国をあげての事業となり、2005年の「子ども・子育て応援プラン」以降、子育て支援事業が法定化されてきたことは周知のとおりである。一方、保育の場においても、その子育て支援機能については、2001年の「児童福祉法」改正に続く、2008年の改正『保育所保育指針』、および改訂『幼稚園教育要領』いずれにも明記され、保育者は、在園する親子のみならず、地域の子育て中の親子に対して、その専門的役割を担うこととなった。つまり、これからの保育者の役割や専門性として、保育者も地域全体に目を向け、「保育」と「子育て支援」を統合する視点が必要との認識が高まってきたのである。(小川博久,2011、大豆生田啓友,2013、天野珠路,2013ら)

そこで、保育者の養成課程を見てみると、保育士養成課程では、平成22年7月厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知によるカリキュラム改正により、保育の領域にソーシャルワークやカウンセリングの理論の一層の導入が図られた。一方、文部科学省も教育職員免許法施行規則を改正し、平成22年度入学生より「教員として求められる社会性や対人関係能力」として保護者や地域の関係者とのコミュニケーションが掲げられている。

先行研究(鯨岡峻,2002、岡野雅子,2003、伊藤葉子,2004、金田利子,2006、原田正文,2006、草野篤子ら,2007、2010など)を鑑みても、養成課程における保育実践体験は、次世代育成の意義をも含みもつ貴重な体験学習の場であると言える。しかし、資格・免許のための幼稚園・保育所での実習では、保護者との交流やコミュニケーションは図りにくく、子育て中の親子の姿や様子に直接出会うことには自ずと限界がある。よって、養

成課程において“子育て支援力”を身に付けるためには、実際にどのような具体的な方策が講じられるべきであるかが考えられなければならない。保育者としての資質の基盤となる部分において、“子育て支援力”養成は、カウンセリングやソーシャルワークの専門性を付加して展開するという方向での支援者と支援される側との「与える 受ける」の一方向的な関係ではなく、乳幼児と生活を共にすることになる保育者と子育て世代ならびに地域社会とが互いに育ち、育て合う関係性の醸成を目指すものであり、保育に関する専門的知識を、保護者も含めた保育実践との往還的学びを通じて、実践的な力量としての“子育て支援力”を高めるための養成プログラムを検討することは喫緊の課題と言える状況であった。

2. 研究の目的

子育て支援に関するこれまでの研究の蓄積は、現代の母親の子育て不安や育児困難の現状分析や、各自自治体における多様な子育て支援事業の立ち上げおよび試行段階での実践研究、相談・助言活動、保護者対象の講座や親子のためのイベント企画等の事業内容に関する研究、支援の現場と児童相談所や保健福祉センター、主任児童委員、子育てボランティアなど地域の社会資源との連携に関する研究、そして、保育所や幼稚園などの保育の場における子育て支援に関する実践研究、などを中心に行われてきた。

本研究は、こうして数多く報告されているすぐれた支援のあり方を、地域の実情や施設の状況により個々独立した取組みに留めず、それらを一貫した共通項として、そこで子育て支援に求められる専門性について保育者養成の立場から明らかにし、新たな保育者養成の可能性を見出していこうとする試みである。

3. 研究の方法

本研究では、保育士養成課程をもつ大学、ならびに子育て支援実践を行っている多様な現場へのアンケート調査や視察、聞き取り調査などを行い、保育者の専門性として求められる“子育て支援力”養成の実態について現状分析と考察を試みる。また、それにより、養成課程において養成すべき“子育て支援力”についての枠組みを考え、そこに含まれる構成要素を示すことを目指す。

さらに、以上の研究結果を踏まえ、“子育て支援力”を高めるための養成プログラムを視野に入れ、保育者養成大学と子育て支援施設等で形成する地域支援ネットワークモデル構築のための実践的検討を行う。

4. 研究成果

本研究の進行過程において、次のようなことを行ってきた。すなわち、保育者養成校を対象としたアンケート調査、人口集中あるいは人口過疎という相反する特色をもつ地域

にある子育て支援施設の視察調査、大学が行う子育て支援実践の場に関する視察ならびに聞き取り調査、そして、海外の保育者養成における“子育て支援力”養成の現状に関する調査研究としてニュージーランドでの視察調査である。以下に、これらの結果についてまとめる。

(1) 保育者養成校を対象としたアンケート調査結果について

平成26年10月現在、全国保育士養成協議会会員校の関東ブロック(茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・新潟・山梨・長野・静岡)165校と、九州ブロック(福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄)55校、計220校を対象に質問紙によるアンケート調査を実施し、子育て支援施設の設置状況、保育学生の学内・学外の子育て支援の場への参加状況、保育学生に身に付けさせたい“子育て支援力”(先行研究から抽出した30項目・5段階尺度法)などについて調査した(回収率は33.2%、計73校)。

その結果、得られた因子は、保育学生が親子と直接どのように関わるか、子育て支援とは何かを学ぶ姿勢の2つであった。養成校としては、“子育て支援力”養成の必要性・重要性を強く認識しており、また実際に様々な取り組みを実施している(あるいは、実施しようとしている)ことが明らかになった。但し、そのやり方は、試行錯誤の段階であり、“子育て支援力”についても多様な考え方が存在している。子育て支援施設との連携についても、養成校により様々な状況があり、その実態には課題も多く存在している。特に、保育者養成課程の過密なカリキュラムの中での時間的なやりくりの困難さ、参加の場の確保に始まり、多くの事項を調整し、事前・事後指導を担当している教員の負担の大きさなどは、共通した課題となっていることが確認された。

一方、身に付けさせたい“子育て支援力”については、様々な人々とのコミュニケーションを中心とした「実践力」、子どもや保護者・親子・家族・子育て・地域の実情・保育者の役割・子育て支援施設の機能と役割等々に関する「理解」、親子とふれあう「経験」そのものの意義などの面から様々な結果が得られ、多様性・多層性と同時に曖昧さも否めない現状であった。保育者養成課程における子育て支援の位置づけとしては、保育の“上級編”として、まず「子どもの保育」があり、その学びの先に子育て支援があるという考え方と、保育の“入門編”として、体験学習の場、保育実習の事前学習の場、初学者の学修への動機付けの場という位置づけといった異なる二つの考え方が存在することが分かった。それにより、子育て支援実践の場での経験を、保育の補完的な学びとして捉えるのか、より広範な保育の学びとして捉えるのか、柔軟で多様なあり方のモデルを構築していく必要性が浮き彫りとなった。

(2) 子育て支援施設での視察調査結果について

熊本県水俣市、鹿児島県阿久根市の人口過疎地域と、熊本県熊本市、福岡県福岡市・春日市、静岡県浜松市、神奈川県川崎市、千葉県市川市、そして東京都江東区・国分寺市などの15余施設において視察調査を行った。(うち9施設について5.の〔その他〕にある報告書を作成。保育園併設型、企業創設型、行政直営の複合型、NPO法人による行政委託型、大学による行政委託型、大学直営型など異なる運営主体による子育て支援施設の運営状況、各事業の特色、保育学生の受け入れ状況をまとめ考察を加えた)

その結果見えてきたのは、各施設は、共通して地域における子育て・子育てを支える役割をそれぞれに担っているものの、その設立理念や運営のあり方には異なる特長をもっているということ、それはその地域や利用者の特性や実状に大きく由来するものであることといった子育て支援実践の場の「地域性」や「独自性」であった。同時にこれらの施設は、自施設のスタッフの養成・研修ばかりでなく、地域住民を巻き込んだボランティアやサポーターの養成、様々な経験や場の提供や、施設間の情報交換や協力関係の構築などにも力を注いでおり、そこには運営の核となる魅力あるキーパーソンの存在が認められ、その人物の理念や信念に支えられた「共生性」とでも言える特長を有していた。各施設の保育学生受け入れの状況には差や違いがあることも分かったが、この「共生性」を経験できることは、子どもや保護者ほか多様な他者との関わりや育ちを支えていく保育者養成にとっても高い価値となると考えられる。

(3) 大学が行う子育て支援実践の場に関する視察調査結果について

学内に子育て支援施設をもち、そこを活用して先進的な教育実践を行っている保育者養成校(札幌大谷大学短期大学部、桜の聖母短期大学、東京都市大学、昭和女子大学、中部学院大学、金城学院大学、大阪保育総合大学、兵庫教育大学、神戸常盤大学、西南学院大学等)において視察調査を行った。その運営は、大学直営型と行政より受託してのNPO法人委託型とがあり、施設は、独自施設を新たに設置した場合と既存施設を改装した場合とがある。また、運営スタッフについても、大学から専従スタッフが配置されている場合と委託先NPO法人スタッフの場合とがある。いずれも保育者養成を行っている大学であることから、主としてひろば事業に保育学生の見学・観察・実践の場を導入しているが、他学部・他学科のボランティア学生の受け入れを行っている大学もあった。

いずれの大学も専門性の高い保育者の養成を目指し、学内子育て支援施設での実践を授業科目と連動させるとともに、授業以外のボランティア参加を種々工夫している。例え

ば、「子育て支援演習」という保育士資格必修科目として学年進行に応じた実習テーマに沿ってひろばでの実習と記録を指導していたり、「子どもの遊びと文化」「保育内容開発論」といった学部授業において手作りおもちゃやプレゼントを制作し、ボランティア参加を行う他、大学院教育として「子育て支援コーディネーター」という大学認定資格を創設し院生によるイベントを企画・実施したり、「保育相談支援演習」授業として、ひろばでの保育実践とその振り返りを継続して実施したりなど様々な現状があり、養成課程必修・必修ではない試みであることから、その成果の検証がそれぞれに報告されているところである。

こうした地域子育て支援実践事業は、全国で80校以上の養成校が行っているが、そこに存在する課題として、常設の施設やそこにかかわる人材の確保の問題、立ち上げ時およびその後の運営予算の問題、運営形態ならびに事業内容の問題、授業科目の養成カリキュラム上への位置づけや到達目標の設定・評価等の問題、資格免許取得のための本実習との関係・関連の問題、他学部学科の学生参加との調整の問題、そして、(1)のアンケート調査でも見たように、ここにかかわる教員の体制や役割分担とその負担などの問題もある。学内施設での実施を志向しながらもそこまでの体制が整っていない現状から、学外の子育て支援施設との連携の道を模索している大学も多く、今後さらなる実態調査を進めていく必要がある。

(4) ニュージーランドでの視察調査結果について

平成27年3月に、研究代表者のそれまでの現地調査実績を基に北島マナワツ地方パーストンノース市ならびにニュージーランド最大の都市であるオークランドでチャイルドケアセンター、プレイセンター、キンダーガルテンなど計12か所での視察調査ならびにMassey大学オークランド校にて養成に関わる教員へのインタビュー調査を実施した。親子の子育ち・子育ての様子については、ニュージーランド特有の認可保育施設であるプレイセンターを中心に学び、幼保施設では、ナショナル・カリキュラムである「テ・ファリキ」の下、子どもの経験と学びを保護者と共有している実際や、実習生・保育者インタビューを含め、保育者養成のあり方ならびに保育者自身の成長と学びに関して多くの示唆を得た。同時に、その保育環境からそこに現れる子どもの遊びや育ちに対する保育観や保育理念、保育実践の場が自らの実践をより良いものに改善・構築し直していくプロセスについても読み取り考察する好機を得た。

保護者自身が保育者を務めるプレイセンターにおいては、親教育プログラムの存在とファシリテーター役の機能に支えられ、保護者自身の主体的参加を通じて保育の質を担

保しつつ展開されている保育の実際を確認することができた。また、祖母や年上のきょうだい、他の専門分野を専攻中の大学生などといったケアギバーという役割の存在は、そこで過ごす人々の異世代間を繋ぎ、様々な移民家族を受け入れる多様性、異質なものを排除しない空気や寛容さを生み出していた。一方、幼保施設においては、養成制度自体の特徴として、登録教員となるために2年間という長い現場実習を経ながら、自己の学びのプロセスを絶えず省察し、自己評価を繰り返しながら、本人・現場の指導者・養成校教員(複数がローテーションしながら一人を担当)との関係の中で時間をかけた学びと指導が行われているその丁寧さを知ることができた。

以上のことをまとめると次のようになる。

1) “子育て支援力” 養成の実態について

保育者養成において“子育て支援力”の養成は、多くの場合、養成課程の構造的なカリキュラムの不備を補う形で、各養成校の一部の教員によって担われている現状であることが確認された。過密なカリキュラムの間を縫うようにして、保育の“入門編”としてボランティア参加を促したり、あるいは、保育の“上級編”として選択科目を設置したり、中には、特色ある必修科目として学科のカリキュラム構成に親子が過ごすひろばでの観察や実習が取り入れられていたりしていた。

“子育て支援力”を考える枠組みとしては、多様な考え方が存在している現状から、その構成要素を明確に導き出すまでには至らなかったが、養成校の視察調査と総合して、次のような項目が考えられる。すなわち、気負わずリラックスして世間話ができるなど親子に自然にかかわる姿勢、遊びを通じた子どもの発達理解、子どもの遊びにかかわる教材研究やそれらを用いた実践的スキル、親子に提供するプログラムの計画ならびにその実践力、親子が心地よく過ごせるための場の環境(モノ、人、時間、空間)を考え創り出す力、親子とのかかわりを通じて楽しさや嬉しさを共有する力、親子の関係の実態や変化を通じたそれぞれの内面理解、親子を取り巻く環境や地域社会との繋がりも含め、情報を収集し、子育て支援とは何かを考え志向する姿勢、出来事の意味を考え、自らの実践を振り返る力などである。

以上のような“子育て支援力”の意義を理解する熱心な教員がいる場合、各養成校の特性(時間割やクラス編成など)にあわせ、独自の学内施設ばかりではなく、地域の子育て支援実践の場と連携した地域子育て支援にも取り組まれていることが明らかになった。

2) 養成課程における学生の学びについて

本研究での調査研究を通じて、学生には、資格免許のための正規実習での集団保育の場の経験だけでなく、子育て支援実践の場において、肯定的に受け入れてくれる保護者やスタッフとの出会いを通じ、穏やかで柔ら

かい雰囲気の中で、親子とゆったりとふれあう経験や、子どもや多様な人々と出会い、広く学ぶ経験を得ることの意義や重要性が確認できた。

保育学生が、人間理解の専門家として、子どものみならず、子どもを取り巻く環境や保護者や地域社会への理解も備えた専門性の高い保育者になるためには、1)で挙げたような「子育て支援力」を身に付け、子どもの育ちの背景にあるものもイメージできるようになることが必要である。つまり、「子育て支援」の場から「保育」の学びが一層深くなることが考えられる。

(5)研究成果の発信および今後の課題

本研究の成果発信については、調査研究と同時進行的に、学会発表にて精力的に行った。また、視察報告書(2015年、47頁)ならびに、日本保育学会第69回大会における自主シンポジウムの開催とその報告書(2017年、41頁)にまとめ、主に保育者養成校教員を対象として配付した。今後は、受け入れ側施設である子育て支援施設への周知を図っていきたいと考える。

今後の課題として、新制度や先行研究において、多様で包括的な意味づけがなされている「子育て支援」については、「子育て支援力」養成を考える上で、今後もさらなる精査が必要である。『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の3法令改訂・改定の流れにおいて、特に、『保育所保育指針』では、従来の第6章保護者支援から、第4章子育て支援という新たな位置づけがなされたが、保育者の専門性を考える上で、その経緯や考え方をきちんと理解する必要がある。

また、学内施設にしる、学外施設にしる、保育学生の受け入れ側施設が、子育て支援の立場から、保育者養成についてどのように考え、支援者の専門性との関連をどのように捉えているのか、保育者養成校と子育て支援実践の場との連携の可能性を求めて、それらの施設を対象とした調査研究が必要であると考える。さらに、このことについての分析・考察のためには、ニュージーランド以外に構想しているドイツ・スウェーデンなどの海外の保育・子育て支援の場における保育者養成との関係性についても調査研究を進めていくことが求められていると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

矢萩恭子・斉木美紀子、保育者養成校と保育・子育て支援実践の場との連携に関する研究、査読有、田園調布学園大学紀要、第11号、2016、263-293

矢萩恭子、ニュージーランドECEにおける保育環境に関する視察結果の検討、査読有、田園調布学園大学紀要、第10号、2015、

259-283

矢萩恭子・中原篤徳・大島みずき、ニュージーランド幼児教育海外研修プログラムの現状と課題、査読有、田園調布学園大学紀要、第9号、2014、109-137

星三和子・塩崎美穂・向井美穂・上垣内伸子、地域子育て支援拠点における困難や悩みをもつ親の支援に関する考察:支援職の「語り」の分析、査読有、保育学研究52(3)、2014、332-343

[学会発表](計19件)

松田純子・矢萩恭子・菊地知子・塩崎美穂、保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(4)、日本保育学会第69回大会、2016年5月7日、東京学芸大学(東京都小金井市)

矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子・松田純子、保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(3)、日本保育学会第69回大会、2016年5月7日、東京学芸大学(東京都小金井市)

上垣内伸子・星三和子・塩崎美穂・向井美穂、子育て・子育て支援におけるリスク支援(6) 複数機関の連携、日本保育学会第69回大会、2016年5月8日、東京学芸大学(東京都小金井市)

中澤智子・菊地知子・唐澤友美・浜崎由紀子、大学内乳児保育施設における保育の実践(2)、日本保育学会第69回大会、2016年5月8日、東京学芸大学(東京都小金井市)

矢萩恭子、ニュージーランドECEにみる子ども・子育て支援(2) ある地方都市の複合施設の視察調査報告、第17回日本子ども家庭福祉学会、2016年6月5日、日本社会事業大学(東京都清瀬市)

Yasuko Yahagi, Miho Shiozaki, Tomoko Kikuchi, Jyunko Matsuda, A Study on the child-rearing practice in the university for ECEC, 68th OMEP World Assembly and International Conference, 2016.7.7, Ewha Womans University (ソウル/大韓民国)

矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子・松田純子、保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(1)、日本保育学会第68回大会、2015年5月9日、椋山女学園大学(愛知県名古屋市)

松田純子・矢萩恭子、保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(2)、日本保育学会第68回大会、保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(1)、日本保育学会第68回大会、2015年5月9日、椋山女学園大学(愛知県名古屋市)

菊地知子・中澤智子・肥後雅代・唐澤友美・浜崎由紀子、大学内乳児保育施設における保育の実践(1)、日本保育学会第68回大会、2015年5月9日、椋山女学園大学(愛知県名古屋市)

高田文子・小玉亮子・菊地知子、東日本大震災が保育・子育てにもたらしたものの、日

本保育学会第68回大会、2015年5月10日、
椋山女学園大学(愛知県名古屋市)
塩崎美穂・上垣内伸子・星三和子・向井美穂、子育て・子育て支援におけるリスク支援(4) 民生委員との連携、日本保育学会第68回大会、2015年5月10日、椋山女学園大学(愛知県名古屋市)

上垣内伸子・塩崎美穂・星三和子・向井美穂、子育て・子育て支援におけるリスク支援(5) 行政担当者との連携、日本保育学会第68回大会、2015年5月10日、椋山女学園大学(愛知県名古屋市)

矢萩恭子、ニュージーランドECEにおける保育環境について考える(2) あるPreschoolの15年間の変化から、国際幼児教育学会第36回年次大会、2015年9月12日、大邱大学校(大邱市/大韓民国)

矢萩恭子、ニュージーランドの世代間子育てと交流と日本の子育て支援実践、日本世代間交流学会第6回全国大会シンポジウム、2015年10月3日、追手門学院大阪城スクエア(大阪府大阪市)

Yasuko Yahagi, Miho Shiozaki, Tomoko Kikuchi, Junko Matsuda, Study on a Framework about the practical specialty of parenting support in Early Childhood Education and Care in Childcare Teacher Training, 67th OMEP World Assembly and International Conference, 2015.7.30, Omni Sheraton Hotel(ワシントンD.C./U.S.A)

矢萩恭子、ニュージーランドECEにみる子ども・子育て支援(1)、第16回日本子ども家庭福祉学会全国大会、2015年6月7日、関西学院大学(兵庫県神戸市)

矢萩恭子、地域子育て支援拠点の再編と支援者意識、日本保育学会第67回大会、2014年5月17日、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学(大阪府大阪市)

矢萩恭子、ニュージーランド Playcentreにみる子育て支援機能の特徴、日本子ども家庭福祉学会第15回全国大会、2014年6月8日、新潟県立大学(新潟県新潟市)

菊地知子、育ち合い・支え合いの視点から見る震災後の保育・子育て支援とその周辺、乳幼児精神保健学会第17回全国学術集会、2014年11月23日、日本大学(福島県郡山市)

[図書](計10件)

矢萩恭子、保育・子育て支援演習第6章地域のことを理解しよう、萌文書林、2017、68-80

塩崎美穂、保育・子育て支援演習第14章派遣型日本福祉大学「NHKパパママフェスティバル」、萌文書林、2017、148-153

近藤幹生・塩崎美穂、保育の哲学2、ななみ書房、2016、64頁

松田純子、保育・教職実践演習-自己課題の発見・解決に向けて実践編第4章養成課程における学びの総括-コミュニケーション

ン-、萌文書林、2016、67-79

お茶の水女子大学いずみナーサリー乳児保育実践研究会(代表菊地知子)、いずみ文庫いずみナーサリー教養講座「階段教室と保育家具」「『星の王子さま』から保育を考える」、甲文堂、2017、50頁

矢萩恭子、子育て支援と心理臨床 vol.10、福村出版、2015、96-99

近藤幹生・塩崎美穂、保育の哲学1、ななみ書房、2015、64頁

近喰晴子・虎屋壽廣・松田純子編著、保育実習 基本保育シリーズ、中央法規出版、2016、268頁

塩崎美穂、子どもと地域と社会をつなぐ家庭支援論8章4節1 イギリスの子育て状況-すべての子どもの幸せを願う政策への転換、4節2 イギリスの子育て政策-家族政策としての保育・教育、福村出版、2015、134-142

菊地知子、子どもと地域と社会をつなぐ課程支援論第3章子どもから見た生活、福村出版、2015、43-57

[その他](計2件)

<報告書>

矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子・松田純子、日本保育学会第69回大会自主シンポジウム報告書、保育者養成校と子育て支援実践の場をつなぐ-保育者養成における“子育て支援力”育成について考える-、2017、41頁

矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子・松田純子、視察報告書、子育て支援に関する保育実践力をはぐくむために 保育者養成校と子育て支援施設の連携の可能性、2015、47頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢萩 恭子 (YAHAGI, Yasuko)

田園調布学園大学大学院・人間学研究科・教授

研究者番号：60389830

(2) 研究分担者

菊地 知子 (KIKUCHI, Tomoko)

お茶の水女子大学・人間発達教育研究センター・研究協力員

研究者番号：30436729

塩崎 美穂 (SHIOZAKI, Miho)

日本福祉大学・子ども発達学部・准教授

研究者番号：90447574

松田 純子 (MATSUDA, Junko)

実践女子大学・生活科学部・教授

研究者番号：10407215

(3) 研究協力者

大島 みずき (OOSHIMA, Mizuki)

群馬大学大学院・教育学研究科・講師

研究者番号：90633438